



あなたが信じる「お金の常識」、
もし、すべてが壮大な勘違いだとしたら？

書籍『きみのお金は誰のため』が解き明かす、社会の真実

私たちは、お金について
「3つの大きな謎」を解かずに生きている。



「お金とは何か？」
この問いに、即答できますか？



多くの社会人が抱える漠然とした不安の正体は、
お金の本質を知らないことにあります。



本書は、中学生の優斗が謎の投資家「ボス」
との対話を通じ、経済の仕組みに目覚めていく
「お金の教養小説」。

この旅を通して、3つの謎を解き明かしましょう。

第1の謎：お金の「価値」の正体



なぜ、私たちはあんなにも「お金」を欲しがるのか？

常識：お金があれば、欲しいものが何でも手に入る。
一万円札には、一万円の価値が宿っている。それは絶対的なものだ。

真実：お金自体に価値はない。価値の源泉は「国家による強制力」である。

燃やされる30兆円

毎年、日本銀行では古くなった紙幣が約30兆円分も焼却処分されている。もし紙自体に価値があるなら、燃やすはずがない。それはただの「紙切れ」だ。



サクマドルの話



法定通貨 (Fiat Currency)：金などの裏付けがなく、国家が法的に価値を保証している通貨。

第2の謎：お金が「解決」できること

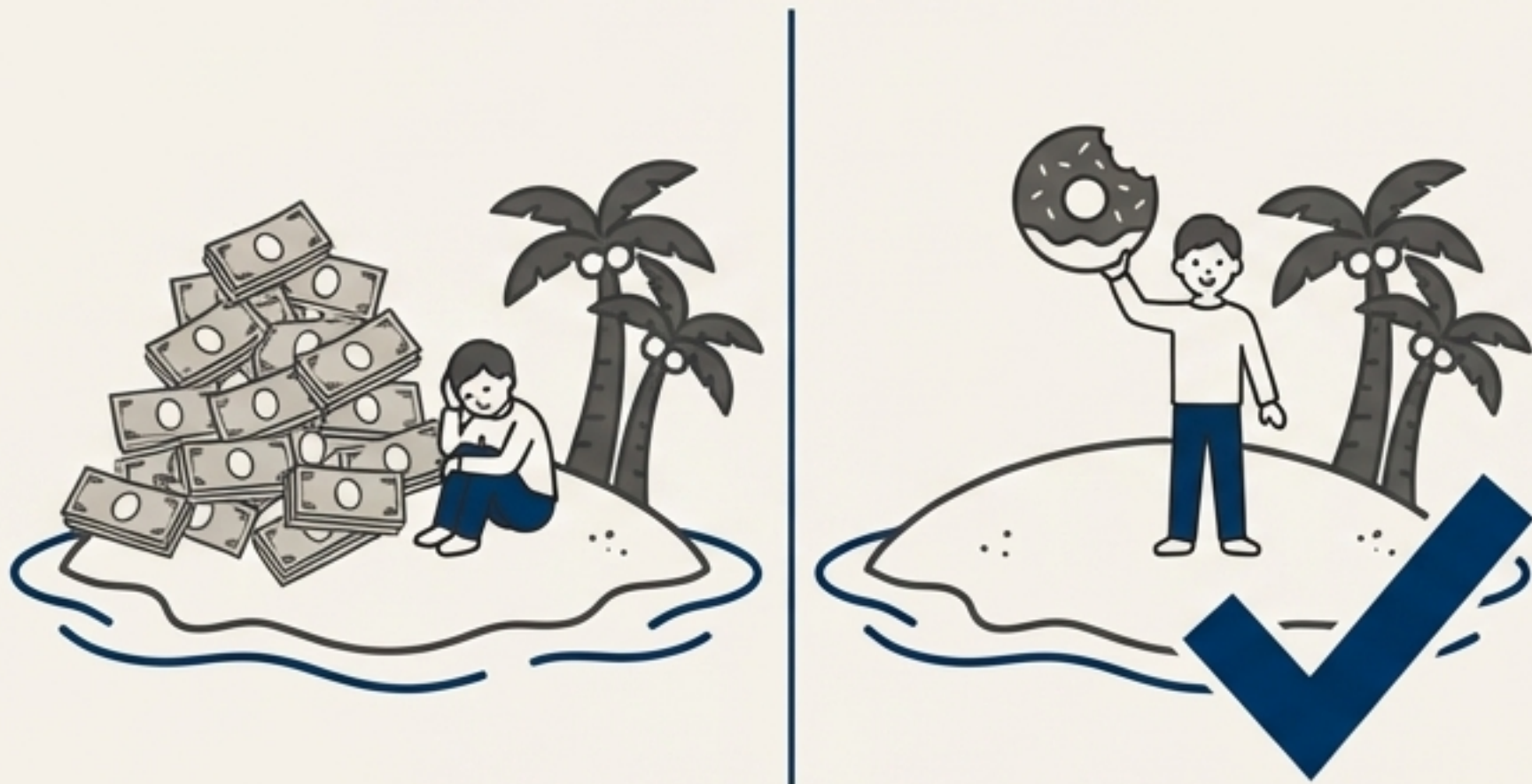


お金があれば、人生の問題は解決できるのだろうか？

常識： 病気、不便、空腹…世の中の問題の大半は、お金があれば解決できる。お金は万金の万能の解決ツールだ。

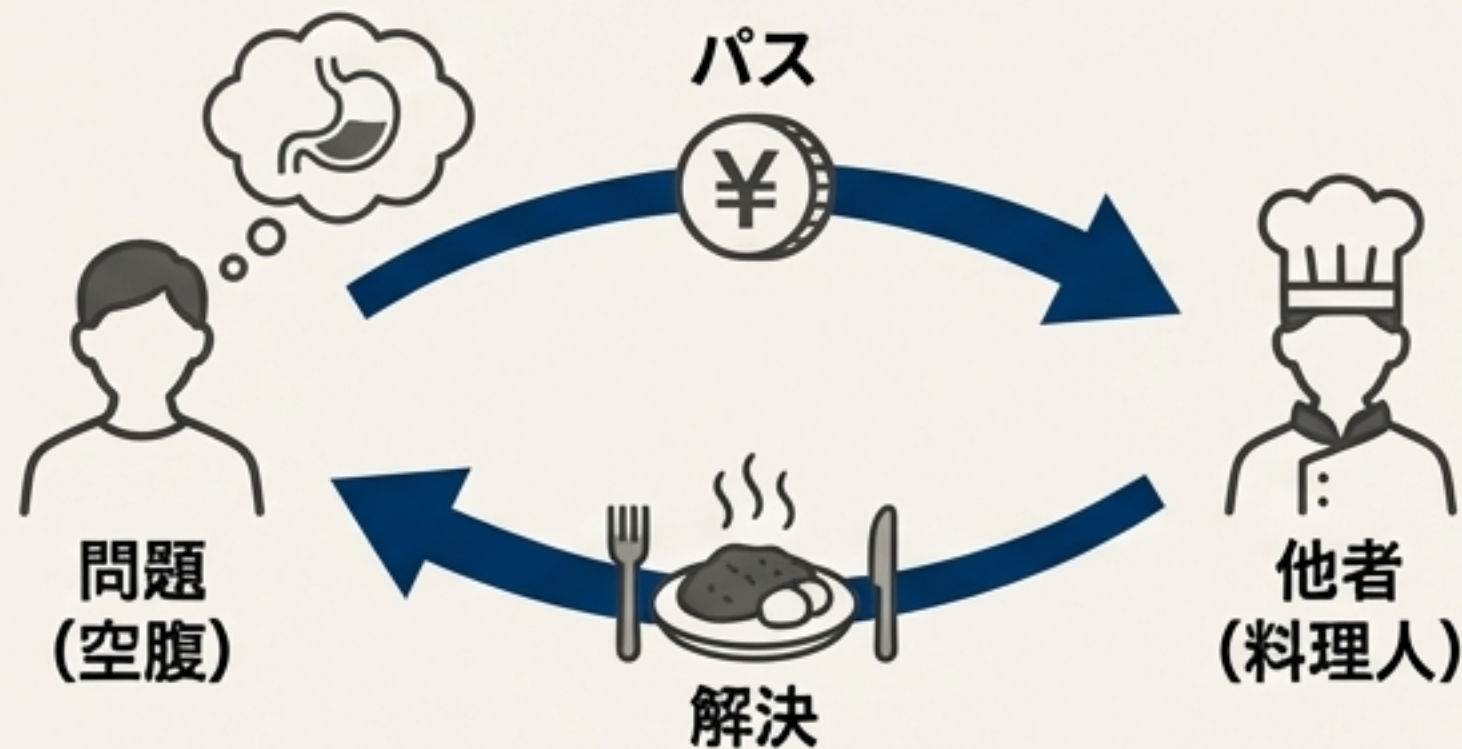
真実：お金は問題を解決しない。問題を「他人にパスする」道具である。

無人島に持っていくのは？



答えは明白。ドーナツだ。
お金そのものに空腹を満たすカロリーはない。

お金は「問題を他人にパスする」道具



お金が役立つのは「それを受け取って、何かをしてくれる他者」がいるときだけ。

**結論：お金で解決しているのではない。
誰かの労働が問題を解決しているのだ。**

Shift in Perspective

勘違い：「お金を払っているんだから偉い」

真実：「お金を払って、誰かに助けてもらっている」

第3の謎：社会全体で「貯金」をすることの意味



将来のために、みんなで貯金するのは
「正しい」ことなのか？

常識: 老後2000万円問題に備え、個人が貯金をするのは賢明で正しい行動だ。国全体で貯蓄が増えれば、豊かになるはずだ。

真実：全員で貯金しても、社会は豊かにならない。問題は「生産能力」にある。

合成の誤謬：「パンと老人」の話

Panel 1: The Problem



ある国でパンの生産量が減り、人々が不満を抱いた。

政府の対策

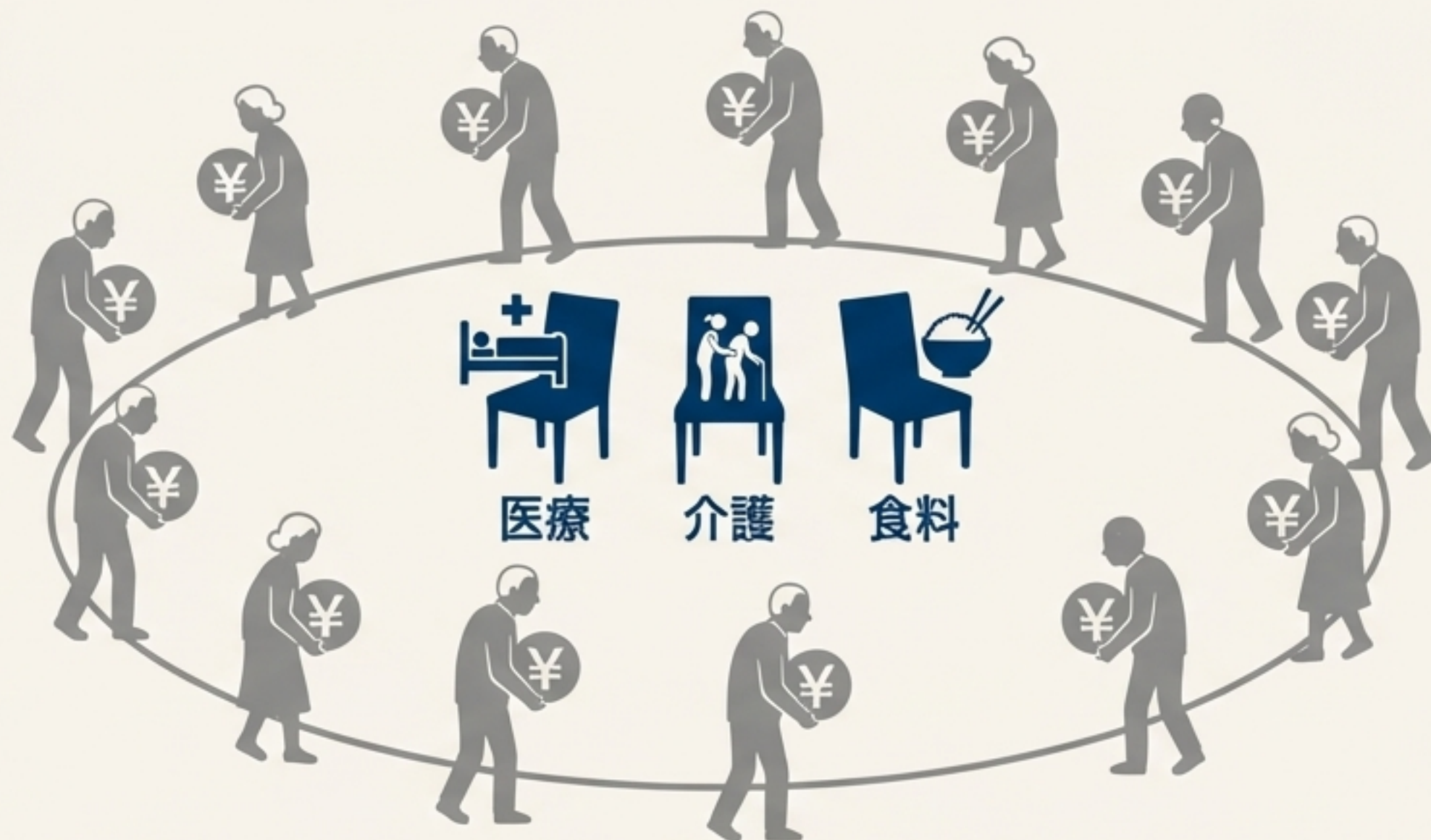
Panel 2: The “Solution”



政府が「全員にお金を配った」。
結果、パンの値段が爆発的に上がるだけ（インフレーション）。

- 社会全体の問題（食料不足、介護不足）は、お金の「量」では解決しない。
- 解決するのは「パンを焼く能力」や「介護をする人の数」、つまり社会の「生産能力（供給能力）」である。

日本の未来は、残酷な「イス取りゲーム」である。



プレイヤー（お金を持つ高齢者）はたくさんいるのに、イス（介護士、医師、食料生産者など）が足りない。

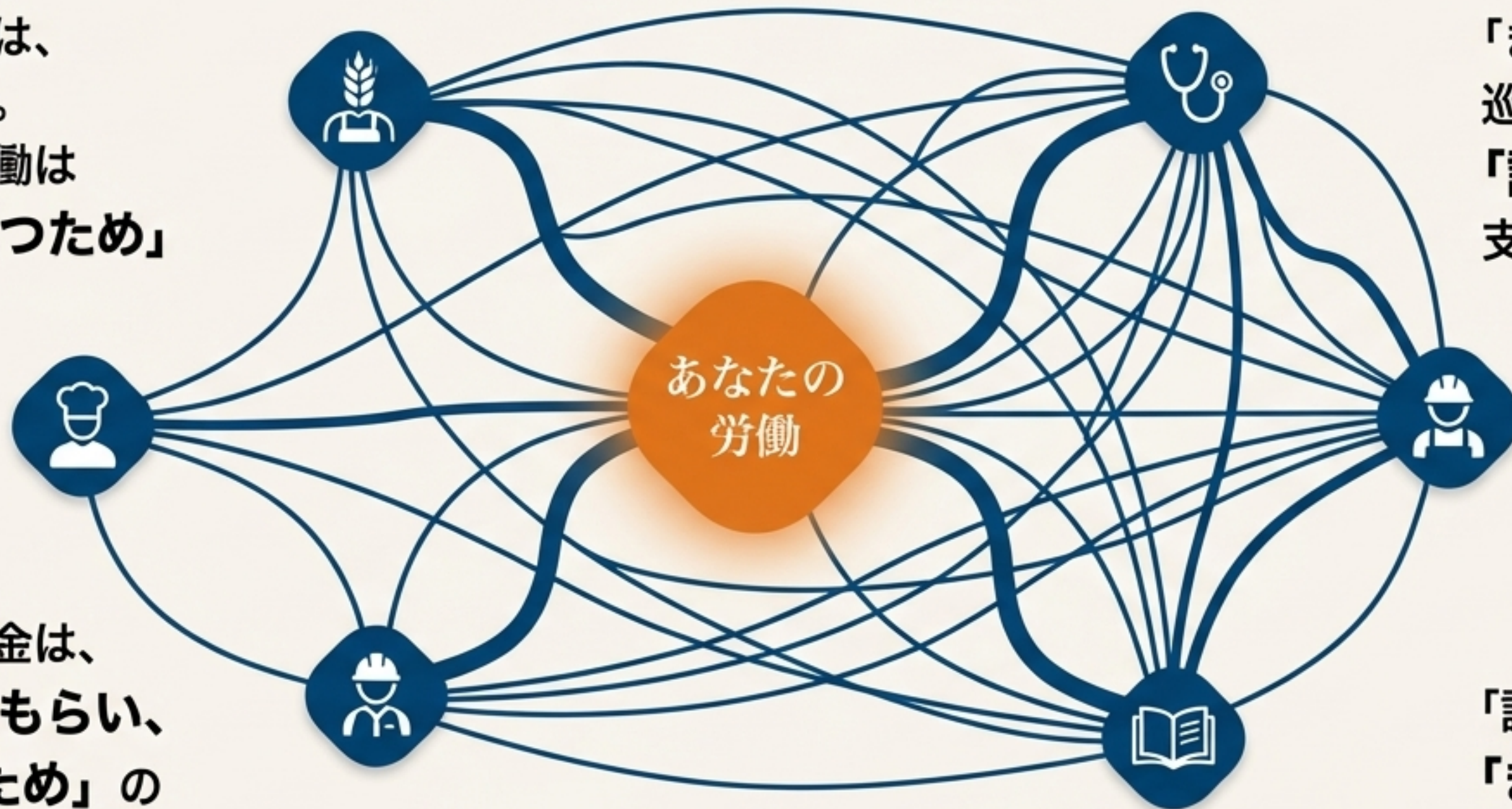
いくら高齢者が大量の貯金（お金）を持っていたとしても、介護をしてくれる若者（イス）がいなければ、そのお金はただの紙切れになる。

本当の課題は、お金を貯めることではない。「**社会全体の生産力をどう維持するか**」である。

では、きみのお金は誰のため？

私たちが働くのは、
お金を得るため。
しかし、その労働は
「誰かの役に立つため」
にある。

私たちが使うお金は、
「誰かに働いてもらい、
助けてもらうため」の
チケットである。



「きみのお金」は、
巡り巡って
「誰かの生活」を
支える。

「誰かの労働」が、
「きみの生活」を
支えている。

社会とは、お金という血液を通して、
見知らぬ誰かと助け合う巨大なチーム。



お金という「数値」の向こうにいる、
「人間」を見つめて。

「私たちは日々、株価やGDPといった『数字』ばかりを見て一喜一憂している。しかし、本当に大切なのは『数字』ではなく、その数字が動かす『実体』——汗を流してパンを焼く人、夜遅くまで道路を工事する人、笑顔で接客する人たちの存在そのものなのです。」

Kaoru

困ったときに助け合える社会、
子供たちが希望を持てる社会を作ることこそが、
本当の「投資」ではないか。

あなたの仕事は、間違いなく
世界の誰かを救っている。

あなたが払ったそのお金は、巡り巡って誰かの明日を作っている。

「お金の向こうに人がいる」

その単純で美しい真実に気づいたとき、世界はこれまでより少しだけ、優しく見えるはずだ。